

시조

時調四四三首選

瀨尾文子 著

月夜藥師寺東塔

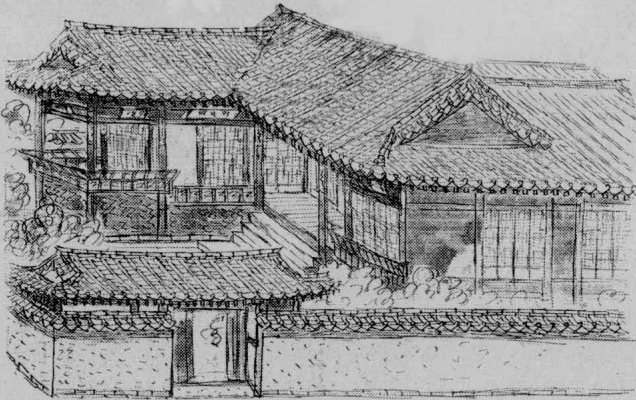
育英出版社



시조

時調四四三

瀨尾文子著
蘇南業學院圖書館
藏書章



育英出版社

著者 瀬尾文子（せお ふみこ）

1927年朝鮮で生れる

第二次世界大戦の終戦により日本に引き揚げ

短歌『水甕』同人

歌集『響』

愛知韓国学園名古屋韓国学校で韓国語を学ぶ

韓国 第4回時調文芸賞

韓国 時調学会会員

現住所 〒466-0851 名古屋市昭和区元宮町六丁目十七番地

TEL. 052(751)1788

FAX. 052(751)1788

時調四四三首選

1997年9月25日 第1刷発行

著者 瀬尾文子

発行者 鶴岡正夫

発行所 育英出版社

〒101-0025 東京都千代田区神田佐久間町3-33

三井田ビル5F

電話 03-5696-2292

Fax. 03-5696-2350

印刷 本 壮光舎印刷株式会社

© Seo Fumiko, 1977

ISBN4-901019-88-0 C1398

序

韓国時調學會顧問

慕山 ちんさいかん 沈載完 (シムジェワン)

瀬尾文子女史가 韓国の 語文을 공부하고 時調를 研究한지 20余年에 드디어 日訳書「時調」를 刊行하게 되었다. 4半世紀 동안 心血을 기울여 取得한 成果이니 著者로선 人生一代의 事業이 되겠고 이 일을 지켜보던 親知들은 祝辭를 보내며 感歎하고 있다. 筆者 또한 그 중의 한 사람으로 著者の 請으로 序文을 쓰게되어 다시 著者の 研究 課程을 回想하며 本書 刊行의 意義를 생각해보니 感慨 자못 크다 하겠다.

<時調>는 韓国 定型詩 中の 하나로서 長久한 歷史와 連綿한 傳統을 지닌 韓国 固有詩의 代表的 存在라 하겠으니 많은 韓国詩가 起滅해온 속에서 時調는 發生以後 오늘까지 存続해온 唯一한 詩歌이기 때문이다.

時調 作家는 王室에서 妓女에 이르는 모든 階級의 國民이요, 그 作品은 形式이 짧고 理解가 쉬워서 또한 貴族 平民할 것 없이 그 創作에 參與하고 愛誦하여 왔다.

時調는 古時調・現代時調로 区分하기도 한다. 今世紀 들어 韓國은 開化가 시작되고 新文芸思潮가 流入되자 時調 創作 또한 그 內容과 表現이 旧殻을 벗어나게 되니 이를 現代時調라하고 그 以前의 作品들을 古時調라 한다. 著者는 주로 古時調를 研究해 왔고 本書의 対象으로 다루고 있다.

古時調의 遺産은 約 4,500 首인데 本書는 그 10 分の 1 인 443 首를 拔粹하여 注釈・翻譯・解説을 加하고 있다. 時調 作品의 古語를 解釈하고 故事熟語의 뜻을 밝히는 일은 쉬운 일이 아니고 適切한 訳語를 찾는 일은 더욱 어려운 일이다.

“翻譯은 또 하나의 創作이다.”란 말대로 時調의 翻譯은 原意 傳達과 더불어 翻譯 또한 獨創性을 지닌 詩가 되어야 하니 이 일은 누구나

할 수 있는 일이 아닐 것이다. 즉 韓國時調를 日本詩로 再生시켜야 하니 瀬尾女史같은 日本歌人이라야 可能한 일이다. 本書는 適人을 만나서 이루어진 幸福의 所産이라고 믿어 마지않는다.

拙著『歴代時調大全』로 因하여 나와 緣故를 맺은 著者는 毎年一回씩 名古屋-大邱를 往復하며 時調解説에 힘썼다. 내가 時調를 研究하고 또 日本語에 通하기 때문에 그 指導를 担当한 셈이다.

作品内容을 糾明하기 위하여 語句 解釈을 하는데 著者는 主로 辞典에 依存하다보니 同音異義의 混同, 時制의 模糊性 등의 分揀이 아니 되는 일들은 쉽사리 바로잡을 수 있으나 한 句節의 解釈이나 한 作品의 主題 設定에는 異見이 있어 長時間 討論 끝에 結論을 얻기도 하였다. 著者는 時調 解釈에 많은 穿鑿을 하고 翻譯에서는 推敲와 改稿를 거듭하는 課程을 밟았으니, 그 險路에서 보여준 굳센 意志와 끈덕진 努力은 感歎하지 않을 수 없었다.

研究에 지쳐 보이는 女史에게 慶州나 海印寺의 觀光을 勸하면 공부하러 왔다하며 이를 辭讓하였다. 그러나 時調의 有名作家 遺跡을 찾는 일은 빠뜨릴까 애쓰며 冶隱 吉再의 遺跡地인 金烏山 採薇亭, 蘆溪 朴仁老의 宗家와 道溪書院, 退溪 李滉의 陶山書院 등의 探訪을 놓치지 않았다.

韓國人の 情緒를 노래한 <時調>를 日本詩로 再現시켜 鑑賞할 때 日本人은 韓國人の 心性을 理解하게 될 것이요. 真正한 善隣의 도움이 되기도 할 것이다. 여기에 本書刊行의 意義는 한결 크다 할 수 있을 것이다.

瀬尾女史가 <時調>의 發刊을 위하여 献身한 긴 歲月의 苦役을 慰勞하고 빛난 業績을 쌓은 功을 거듭 들추며 序文에 갈음 하는 바이다.

1997년 丁丑 5월 夏至節

翻譯

瀬尾文子女史が、韓國の語文と時調の勉強を始めて、二十余年経ち、遂に日訳書「時調」を刊行するに至った。4分の1世紀のあいだ、心血を注ぎ取得した成果である。著者にとっては、人生一代の仕事であ

り、この仕事を見守ってきた親しい知人らは、祝辞を贈りつつ感嘆している。筆者も其の中の一人だが、著者の要請で序文を書くに到った。再び著者の研究課程を回想し、また本書刊行の意義を思い見るに、感慨すこぶる大なるものがある。

「時調」は韓国定型詩中の一つであり、長久なる歴史と連綿たる伝統をもつ、韓国固有詩中の、代表的存在である。なぜならば、多くの韓国詩が起滅した中で、時調のみは発生以後、今日まで存続している、唯一の詩歌だからである。

時調の作者は、王室から妓女に到るまで、あらゆる階級の国民である。その作品は、形式が短く、理解が容易で、また貴族平民の区別なく、其の創作に参加し愛誦してきた。

時調は古時調・現代時調に区分することがある。今世紀に入り、韓国は開化し始め、新文芸思潮が流入するや、時調の創作、其の内容と表現に於いて、旧い殻を脱皮した。これを現代時調と云い、それ以前の作品を古時調と云う。著者は主に古時調を研究して、本書の対象に扱っている。

古時調の遺産は約4500首である。本書は其の10分の1の443首を抜粋して、注釈・翻訳・解説を加えている。時調作品の古語を解釈し、故事熟語の意を明らかにすることは容易ではない。適切な訳語を探すことは、なおさら難事である。

“翻訳は又一つの創作である”と云われる。時調の翻訳は、原意の伝達と共に、翻訳もまた独創性を持つ、詩であらねばならぬ。その事は誰もが出来ることではない。即ち、韓国時調を日本詩に再生するには、瀬尾女史の如き日本歌人であってこそ可能なのである。本書は適人者に逢い、成し遂げられた幸運の所産であると信じてやまない。

拙著『歴代時調全書』により、私と縁を結んだ著者は、毎年一回、名古屋・大邱間を往復しながら、時調解説に力を注いだ。この私が時調を研究し、日本語にも通じていた故、その指導を担当したわけである。

作品内容を糾明するため、語句の解釈をするのに、著者は主に辞典に依存する。故に同音異義の混同、時制の模糊性などの分別が出来な

いことがある。これらは容易に訂正することができる。然し一句節の解釈、或いは一作品の主題設定には、違った意見があり、長時間討論を経て、結論を得ることもあった。

著者は時調の解釈に多くの穿鑿^{けんさく}を為し、翻訳では推敲と改稿を重ねる課程を踏んだ。その険路にて見せた堅い意志と、ゆるみなき努力には、感嘆せざるを得なかった。

研究に疲れ果てた女史に、慶州や海印寺の観光を勧めたら、勉強に来たとて断られた。然し時調の有名作者の遺跡を訪ねるときには洩らさない。冶隠 吉再の遺跡、金烏山の採薇亭。蘆溪 朴仁老の宗家と道溪書院。退溪 李滉の陶山書院の探訪を逃さなかった。

韓国人の情緒を歌った＜時調＞を、日本語に再現、鑑賞するとき、日本人は韓国人の真正を理解し得て、真正なる善隣の助けになるであろう。此処に本書刊行の意義は、一段と大なるものがあろう。

瀬尾女史が＜時調＞発刊の為に献身した、長い期間の苦役を慰労し、燦たる業績をあげた功を重ねて讃え、序文に代える次第である。

1997年 丁丑5月 夏至節

序

愛知韓国学園理事長

ていかん き

鄭煥麒 (チョンファンギ)

瀬尾文子さんがかねて興味を抱いていた、韓国文化を学ぶため、ハングルの習得を志し、私が理事長を務める名古屋韓国学校に入学したのは、もう二十数年も前のことである。女史は卒業後も勉強のため、しばしば本校を訪れている。その熱意に私は敬意を表する次第である。

女史によるとハングルを学んだのが縁で、韓国の「時調 (シジョ)」という恋人にめぐり会った、という。

恋人「時調」に接すれば接するほどに、その魅力はいつしか女史を虜にした。素晴らしい恋人「時調」に、自分を忘れるほどにのめり込んだ。女史は恋人「時調」に全力を注いだ。

元来、女史は短歌をこよなく愛し、歌集を物にする、歌人でもある。私は女史と韓国の「時調」との出会いには、運命的なものを感じる。私たちは一生の間に、無数な人に出会う。しかし、心から敬意を尽くし、悔いの残らぬ出会いはどのくらいあるだろう。

人生の師、なおまた、自分の魂を揺り動かすような事柄に直面することが、どれだけあるだろうか。

女史は志をもってハングルを学んだ。それが、「時調」との出会いをもたらし、また、そのことが韓国における「時調」の権威、沈載完博士の縁につながっていった。

女史の誠実でひたむきな情熱が「時調」一筋の道を求め、よき弟子たるべき心構えがあったからこそ、よき師、沈博士にめぐり会えたといえよう。沈博士もまた、よき弟子にめぐり会えたことを喜んでいるだろう。

恋人「時調」との出会いから二十数年、気の遠くなるような歳月で、女史は、とうとう恋（時調四四三首選の日記）を見事に実らした。

女史の長い間における不断の努力と忍耐力には、只々感服し脱帽あるのみ。

女史の気持ちを察するに、さぞかし感無量なものがあろう。その成し遂げられた偉業は本校の誇りでもあり、衷心から「おめでとう」と、お祝いの拍手を贈る。

女史は、日本人ただ一人の韓国時調学会の会員であり、短歌「水甕」同人。何年間も自宅で、韓国留学生にバザーを開き、留学生に格安の日常品を提供して、売上は韓国留学生の奨学金にあてた。また、名古屋日韓親善協会・女性会の、役員としても活躍している。

私はこの書が日本社会において幅広く読まれ、日韓文化交流の一助となることを願ってやまない。

いつまでもご健康で、若々しく活躍してほしい。

1997年4月

目 次

序	韓国時調学会顧問 慕山 沈載完 ^{ちんさいかん} 博士	1
序	愛知韓国学園理事長 鄭煥麒 ^{ていかん き}	5
コリア歌謡の定型詩系譜		25
時調の鑑賞について知るべきこと		32

時調四四三首選

高麗末葉の時調^{じ ちょう}

1	禹 倬 ^{う たく}	片手には茨を持ち また片手には棒を握り ^{ぼう にぎ}	34
2		春山に颯と吹きし 雪解の風はなし ^{ゆきげ}	35
3		老いゆかじ 再び ^{また} 若返らんとすれど ^{わかがえ}	35
4	李兆年 ^{り ちょうねん}	梨花に月白く 銀漢は三更の時 ^{ぎんかん さんこう}	36
5	李存吾 ^{り そんご}	雲の無心というは 恐らく虚浪なり ^{ころう}	37
6	崔 螢 ^{さい えい}	緑耳霜蹄肉肥やし 小川の水に濯い跨り ^{またが}	39
7	李 穡 ^{り しよく}	白雪 消え残る谷に 雲ぞ陰しき ^{けわ}	40
8	鄭夢周の母 ^{ていむしゅう}	からすの争う谷に 白鷺よ行くなかれ ^{しらさぎ め}	41
9	鄭夢周 ^{ていむしゅう}	吾が身は死すとも 百たび死すとも	42
10	李芳遠 ^{り ほうえん}	あれも いかにあれ これも いかにあれ	44
11	李之蘭 ^{り しらん}	楚山の吼ゆる虎と 沛沢に潜める龍と ^{ひそめ りゅう}	45
12	吉 再 ^{きつ さい}	五百年の都邑地を 匹馬にて訪ぬれば ^{ひつば}	46
13	元天錫 ^{げんてんしやく}	興亡は数に有り 満月台も秋の草 ^{まんげつだい}	47

李朝前期の時調^{じ ちょう}

14	鄭道伝 ^{ていどうでん}	仙人橋を下る水 紫霞洞に注ぎ ^{し かどう そそぎ}	48
15	趙 浚 ^{ちよう しゅん}	夕陽に酔興昂じ 驢馬の背に跨り ^{またが}	49
16		酒に酔っぱらい 帰路の空山に臥す ^{きろ ぐうざん が}	50

17	もうしせい 孟思誠	こうこ 江湖に春の訪れ	ゆうしんおの 遊心自ずと生ず	51
18		こうこ 江湖に夏の訪れ	そうどう のどか 草堂にて長閑なり	51
19		こうこ 江湖に秋の訪れ	もろうお 諸魚肥えたり	52
20		こうこ 江湖に冬の訪れ	せきせつ 積雪 尺を越ゆ	52
21	こう き 黄 喜	こうこ 江湖に春きたり	うた こせわ 身は転た事忙し	53
22		かさ みの 笠に簑をまとい	さいう かつ 細雨中に鉞を担ぎ	54
23		なつめ ほお あか たに 棗の頬 赤き谷に	くり 栗はなぜに落ち次ぐ	55
24			ゆ 山は鳥の絶え 野は行く人なし	56
25	り しよく 李 穰		しらさぎ わら なか からすの黒しと 白鷺よ嗤う勿れ	56
26	たん そう 端 宗	しよくはくな 蜀魄啼く山に月は低れ	そうし 相思の苦しみに	57
27	さんそうずい 金宗瑞	さくかう じししやう 朔風は樹梢を鳴らし	めいげつ せつちやう ひ 明月は雪中に冷ゆ	58
28		ちやう白山 長白山に旗を打ち立て	とまんこう 頭満江に馬を濯うを	59
29	おうほうこう 王邦衍	お かな 千万里遠ち方にて	美しき君に別れ	59
30	ゆ おうふ 俞応孚	さくや 昨夜吹きし嵐	そうせつ 霜雪を降らしめ	60
31	りやうせいげん 柳誠源	そうどう 草堂のつれづれに	琴を枕に横たわり	62
32	り がい 李 壇	ぼうない とも 房内に灯れる燭火	しよつか たれ 誰と離別すればや	63
33	ほくほうねん 朴彭年	金は麗水に生ずと雖も	水なべて金を生ずるや	64
34		からす みぞれ かぶ からす 糞を被り	白きも忽ち黒し	64
35	せいさんもん 成三問	しやうざん 首陽山を仰ぎつつ	いせい うら 夷齊を恨むなり	66
36			わが身は死して 何になり変わらん	66
37	か い ち 河緯地	客散りて門を儘し	風微かに月落つる時	67
38	げん こう 元 昊	昨夜のせせらぎ	悲しげに泣きつつ過ぎぬ	68
39	なん い 南 怡	ちやうけん あ 長剣を振り拳げ	はくとうざん のぞ 白頭山に登り臨めば	69
40	げつざんたいくん 月山大君	しやうこう よる あ 秋江の夜更けて	さざ波冷たし	70
41	せい そう 成 宗	とど 留まれと言うに帰るか	かま すすべ 帰らぬ術はなきか	71
42	しやうしふんぶう 笑春風	とうぐ きとう 唐虞を昨日見し如く	かんとうそう きやう 漢唐宋を今日見し如く	72
43		ぜんげん たわむ 前言は戯れのみ	わが言をな咎めそ	73

- 44 笑春風^{しょうしゅんぶう} 齊も^{せい} 大^{たい}国^{こく}なり 楚も^そ また大^{たい}国^{こく}なり …… 74
- 45 李賢輔^{りけんほ} 帰去来^{ききょらい} 帰去来^{ききょらい}とて 辞^{ことば}のみ 帰る者^{きえるもの}なし …… 75
- 46 聾^{ろう}岩^{がん}に登れば 老^{おい}いの眼^め 猶^{なほ}明^あるし …… 75
- 47 其れ 憂^{うれ}えなきは 漁父^{ぎよふ}の生涯^{せいぎわ}なり …… 76
- 48 俯^{うつむ}けば 千^{せん}尋^{じん}の緑水^{りよくすい} 顧^{かへり}みれば 万^{ばん}疊^{じよう}の青山^{せいざん} …… 76
- 49 青荷^{せいかに}に飯^{いい}を包^りみ 緑柳^{りよくりゅう}に魚^{うお}を貫^ぬき …… 77
- 50 山頭^{さんとう}に閑雲^{かんうん}起^すこり 水^{すい}中^{ちゆう}に白鷗^{はいおう}飛^とぶ …… 77
- 51 長安^{ちやうあん}を顧^{かへり}みれば 北関^{ほくけつ}は千里^{せんり}かな …… 78
- 52 成世昌^{せいせいしやう} 洛陽^{らくやう}の浅^はき池^いにて 蓮^{はす}を掘^ほる童^{どう}らよ …… 79
- 53 金湜^{きんしよく} 酒^{さけ}を飲^のみ 且^{かつ}つ酔^よい 琴^{きん}を戯^ぎ弄^{りよう}すれば …… 80
- 54 金 隸^{きんき} あな嬉^きし今日^{けふ}よ あな楽^{がく}し此^{この}の日^ひよ …… 81
- 55 家鴨^{あひる}の短^{みじ}き脚^{あし}の 鶴^{つる}の脚^{あし}となるまで …… 81
- 56 林 晋^{りんしん} 弓^{きう}を張^はり腕^{うで}に通^{とほ}し 劍^{けん}を磨^をぎ腰^{こし}に着^きけ …… 82
- 57 徐敬德^{じょけいとく} 心^{こころ}愚^{おろ}かなれば 為^なすこと愚^{おろ}かなり …… 83
- 58 心^{こころ}よ 汝^{なんぢ}はなげ いつにても若^{わか}きか …… 84
- 59 黄真伊^{こうしんい} 我^{われ}いつ信^{しん}無^なくも 君^{きみ}をいつ裏^{うら}切^きりし …… 84
- 60 ああ 我^{われ}が事^{こと}よ 恋^{こひ}しと想^{おも}わざりしか …… 85
- 61 冬^{とう}至^じの長^{なが}々^々し夜^よを 半^{はん}ば切^きり取^とり …… 85
- 62 青山^{せいざん}は 我^{われ}が心^{こころ} 緑水^{りよくすい}は 君^{きみ}が情^{じよう} …… 86
- 63 山^{さん}は昔^{むかし}の山^{さん}なれど 水^{みづ}は昔^{むかし}の水^{みづ}ならず …… 87
- 64 青山^{せいざん}裡^り 碧^{へつ}溪^{けい}水^{すい}よ 易^{やす}く行^ゆくを誇^なる 勿^なれ …… 87
- 65 林 悌^{りんてい} 青^{あお}草^{くさ}の茂^される谷^やに 眠^ねれるや臥^ふれるや …… 89
- 66 青^{あお}草^{くさ}繁^{さか}れる溪^{たに}に 小^{せう}川^{かう}はせせらぎ流^{なが}る …… 89
- 67 宋 純^{そうじゆん} 風^{ふう}霜^{そう}混^まじる日^ひの 今^{いま}ぞ開^{ひら}き黄^{きう}菊^{きく}の花^{はな}を …… 90
- 68 安 挺^{あんてい} 青^{せい}牛^{ぎゆう}に押^おし跨^{またが}り 緑^{りよく}水^{すい}の流^{なが}れを渡^{わた}り …… 91
- 69 洪春卿^{こうしゅんけい} 珠^{しゆ}簾^{れん}を半^{はん}ば掲^かげ 碧^{へき}海^{かい}を見^みおろす …… 92
- 70 成 運^{せいうん} 田^{うた}園^{えん}に春^{はる}きたりて 身^みは転^{ころ}た事^{こと}忙^{せわ}し …… 92

71	李 混	あれも如何にあれ これも如何にあれ ……	93
72		煙霞を家となし 風月を友となし ……	94
73		淳風 死せりと まさに虚言なり ……	95
74		幽蘭 谷に在り 自然を聞くによし ……	95
75		山前に台有りて 台下に流水なるかな ……	96
76		春風に花満山 秋夜に月満台 ……	96
77		天雲台に登り 玩楽斎 瀟洒に見ゆ ……	97
78		雷霆 山を破るとも 聾者は聞こえず ……	98
79		古人も我に会えず 我も古人に会えず ……	98
80		嘗て行きにし道を 幾年か棄ておき ……	99
81		青山は何故に 万古に青青たる ……	99
82		愚夫も解きゆけば 其は易からずや ……	100
83	曹 植	頭流山の両端水を 昔聞きて今見れば ……	101
84	洪 暹	玉を石と言うに さて無念なり ……	102
85	桂 娘	梨花雨降り頻る時 泣き縋り別れし君 ……	102
86	柳希春	芹 一束を 採りて濯いたてまつる ……	103
87	楊士彦	泰山は高しとて 天の下の山なり ……	104
88	梁応鼎	太平なる天地の間に 箆瓢を肩にかけ ……	105
89	姜 翼	柴扉にて犬の吠ゆ この山村に誰やくる ……	106
90	李後白	蒼梧山の聖帝の魂 雲に憑き瀟湘に向かい ……	106
91		玉梅の一枝を 路傍に棄てたれば ……	107
92	朴啓賢	月明るき五礼城に 十余人友ら坐り ……	108
93	奇大升	豪華と富貴は 信陵君が最たらんも ……	109
94	金応鼎	三冬に麻の衣を着て 岩穴に雪雨を迎え ……	109
95	柳自新	秋山夕陽を帯び 江心に映れる所 ……	110
96	成 渾	時節は太平かな 我が身は閑暇なり ……	111
97	徐 益	緑草清江の上の 轡を脱ぎし馬たりて ……	112

98	李珣	高山九曲潭を	人の知らざりしを	114
99		一曲は いずこ	冠岩に 旭日輝く	115
100		二曲は いずこ	花岩の春の晩れ	115
101		三曲は いずこ	翠屏の葉繁りぬ	116
102		四曲は いずこ	松崖に陽落つる	117
103		五曲は いずこ	隠屏 眺望よし	117
104		六曲は いずこ	釣峽の水広し	118
105		七曲は いずこ	楓岩の秋色よし	119
106		八曲は いずこ	琴灘の月明るし	119
107		九曲は いずこ	文山の歳の暮れ	120
108	鄭澈	父は我を生み	母は我を慈しみ	122
109		大君と百姓との間	天と地なるなり	123
110		兄よ 弟よ 汝ら	膚を撫で合いてみよ	123
111		父母の生ある時に	孝行に力を尽くせ	124
112		一身を二つに分ち	夫婦に結び給えり	125
113		少女の行く道を	少年の避くるが如く	125
114		汝の子は孝経を	何処まで読みしか	126
115		町村の人々よ	正しき行いをすべし	127
116		手首を執らるれば	両手もて支えん	127
117		他人との中に	友ほどの信有らんや	128
118		哀れ かの甥よ	糧なきを如何にする	129
119		汝の家の喪事など	いか程要すや	129
120		今日も明け渡りぬ	歟を担ぎてゆかん	130
121		例え着られずとも	人の衣を奪うなかれ	130
122		双六将棋を為すなかれ	告訴状を出すなかれ	131
123		申し負載せる老いよ	荷物を持たせ給え	132
124		梧桐の葉落ちて	知るなり秋を	133

125	鄭 澈	苦き菜の茹で物 魚よりも美味なり ……	133
126		琴の大絃を弾ずれば 心凡そ和みしを ……	134
127		出発せし頃はいつ 秋風に落葉飛びいき ……	134
128		冬の暖かき陽射しを 君に注ぎまつらん ……	135
129		我が心を刳り取り かの月を造らな ……	136
130		松林に深雪降り 枝挙り花なるかな ……	136
131		我が身を切り苛み 小川の水に浮かすべし ……	137
132		風波に揺れいし船 何処へ行きぬる ……	138
133		彼方に樹てる松 なぜ道端に立つ ……	138
134		あな 伐り給うや 落落たる長松を ……	139
135		一杯飲むべし また一杯飲むべし 花を折りて ……	140
136		花は灼灼 蝶双双 柳 青青 鶯双双 ……	141
137		水の面に影落ちて 橋の上を僧の行く ……	141
138		鳥はねぐらに入り 明るき月は昇りきぬ ……	142
139		新羅八百年に 建立せし聳ゆる塔の ……	143
140		驟雨の一降り 蓮葉よりぶち零れ ……	143
141		酸えし酒を漉し 辛くなるまで飲むべし ……	144
142		我が家の諸々の厄を 汝に負わせたり ……	144
143		中書堂の白玉杯を 十年目に観れば ……	145
144		路上の二体の石仏 裸と飢えに對い立ち ……	145
145		木も病みぬれば 大樹とて憩う者なし ……	146

李朝中期の時調

146	韓 濩	藁座布団を出す勿れ 落葉とて座られずや ……	147
147	趙 憲	池塘に雨の降り 楊柳に煙り漂う ……	148
148		滄浪に糸を垂らし 釣台に坐りいて ……	148
149	宣 祖	参れば帰ると申し 帰れば 戻りこず ……	149

150	李陽元 ^{りようげん}	喬 ^{たか} く聳 ^{そび} ゆる樹 ^き に	吾 ^{われ} を勸 ^{すす} めて登 ^{のぼ} らしめ	150
151	高敬命 ^{こうけいめい}	青蛇 ^{せいだけん} 劍 ^{けん} を担 ^{にな} いて	白鹿 ^{はくろく} に打 ^う ち跨 ^{またが} り	151
152	李舜臣 ^{りしゆんしん}	閑山 ^{かんざんとう} 島 ^{とう} の月 ^{つき} 明 ^あ るき夜 ^よ	茂 ^{じゅう} 楼 ^{ろう} に独 ^{ひとり} り坐 ^ま り	152
153	李元翼 ^{りげんよく}	緑楊 ^{りよくよう} 千 ^{せん} 万 ^{まん} の糸 ^{いと} も	ゆ ^{はる} く春 ^{はる} 風 ^{かぜ} を縛 ^{しば} り得 ^う や	153
154	宮女 ^{きゅうじょ}	前 ^{まへ} の池 ^{いけ} なる魚 ^{うお} ら	汝 ^は が望 ^{のぞ} みて入 ^{はい} れりや	154
155	洪娘 ^{こうじょう}	山 ^{やま} の柳 ^{やなぎ} を選 ^え り折 ^を りぬ	饒 ^{はなむけ} なり 君 ^{きみ} に	155
156	宋綰 ^{そうけん}	白 ^{はく} 水 ^{すい} に早 ^{さな} 苗 ^{めう} を植 ^う え	青 ^{せい} 山 ^{ざん} に柴 ^{しば} を刈 ^{かり} り	156
157		風 ^{ふう} 雪 ^{せつ} 山 ^{さん} 斎 ^{さい} の夜 ^{よる}	相 ^あ 対 ^{たい} す 一 ^{いち} 樹 ^{じゅ} の梅 ^{ばい} と	156
158	趙存性 ^{ちようそんせい}	吾 ^あ 兒 ^こ よ 筐 ^か と背 ^{せい} 負 ^ふ 袋 ^{くろ} を	西 ^{せい} 山 ^{ざん} に陽 ^{やう} は近 ^き し	157
159		吾 ^あ 兒 ^こ よ 蓑 ^{みの} と笠 ^{かさ} を	東 ^{とう} 澗 ^{かん} は雨 ^{あめ} なり	158
160		吾 ^あ 兒 ^こ よ 早 ^{はや} 飯 ^{めし} の粥 ^{かゆ} を	南 ^{なん} 畝 ^ぼ に事 ^{こと} 多 ^{おほ} し	158
161		吾 ^あ 兒 ^こ よ 牛 ^{うし} に食 ^く わせて牽 ^ひ け	北 ^{ほく} 郭 ^{かく} にて新 ^{しん} 酒 ^{しゅ} を	159
162	李恒福 ^{りこうふく}	鐵 ^{てつ} 嶺 ^{れい} 聳 ^{そび} ゆる峯 ^{かみ} に	たゆたい越 ^こ ゆる雲 ^{うみ} よ	160
163		花 ^{はな} よ色 ^{いろ} 香 ^か を奢 ^{おご} り	訪 ^{おも} る蝶 ^{てふ} を拒 ^{こば} むなかれ	161
164	李德馨 ^{りとくけい}	月 ^{つき} は 円 ^{まど} かに	碧 ^{へき} 空 ^{くう} に懸 ^か かりて	162
165	金尚容 ^{きんしょうよう}	大 ^{おほ} 君 ^{きみ} に仕 ^{つか} うるに	正 ^{せい} しき道 ^{みち} へ引 ^{いん} 導 ^{どう} し	163
166		其 ^{その} れ 子 ^こ 供 ^{ども} らよ	我 ^{われ} の教 ^{しよ} えを學 ^{まな} べ	163
167		人 ^{ひと} の事 ^{こと} を言 ^い わず	己 ^{おのれ} を省 ^{かえり} み	164
168		人 ^{ひと} としての	正 ^{せい} しき道 ^{みち} を歩 ^{あゆ} むべし	164
169		言 ^{こと} 葉 ^は を慎 ^{つつし} み	怒 ^{いか} りは更 ^{さら} に堪 ^{こた} えよ	165
170		人 ^{ひと} と争 ^{あらそ} うなかれ	争 ^{あらそ} いは 害 ^{がい} 多 ^{おほ} し	165
171		過 ^{あやま} ちを知 ^し らず犯 ^{おか} せば	悔 ^く いて繰 ^{くり} り返 ^{かへ} すな	165
172		貧 ^{ひん} 賤 ^{せん} を悲 ^{かな} しむ勿 ^な れ	富 ^{ふう} 貴 ^き を妬 ^{ねた} む勿 ^な れ	166
173		欲 ^{よく} に目 ^め の眩 ^{くら} みて	非 ^ひ 理 ^り を為 ^な すなかれ	166
174		夙 ^{つと} に起 ^お き手 ^て を洗 ^あ い	父 ^ふ 母 ^ぼ に挨 ^あ 拶 ^{さつ} を為 ^な し	166
175	朴仁老 ^{ぼくじんろう}	盤 ^{ばん} 中 ^{ちゆう} の早 ^{そう} 紅 ^{こう} 柿 ^し	実 ^じ にも美 ^み 味 ^み に見 ^み ゆ	167
176		王 ^{おう} 祥 ^{しょう} の鯉 ^り を捕 ^{つか} み	孟 ^{もう} 宗 ^{そう} の筍 ^{たけのこ} を折 ^を り	168

177	朴仁老 ぼくじんろう	万鈞を引き伸ばし 長き長き鎖を編み ……	169
178		群鳳集える所に 孤のからすの入りて ……	169
179		無情に立てる岩 有情に見ゆるかな ……	170
180		江頭に屹立したる 之を上げば弥高し ……	171
181		一言も語らぬ岩 相睦まずとも ……	172
182		縄墨なく形成せる岩 何の規矩や知る ……	172
183		巍巍たる九仞峯 衆山中に秀を異にす ……	173
184		松の下なる童らよ 汝らの師はいずこ ……	174
185		隔塵嶺 余りに高く 紅塵は遠くをゆく ……	174
186	申 欽 しん ぎん	歌を創りし人は 愁い 多々なりき ……	175
187		寒食の夜雨に 春の光 遍き渡りぬ ……	176
188		わが胸を刳りし血もて 君が姿を描き ……	176
189		山村に雪降りて 石塊道は埋もりぬ ……	177
190		垂木の長短にあれ 柱の傾歪にあれ ……	178
191		昨夜の雨に 石榴の花 満開なり ……	178
192		川辺のしらさぎ なにゆえ佇てる ……	179
193		窓の外にかさこそ 君かとぞ起てば ……	179
194		酒は幾種類か 清酒と濁酒なり ……	180
195		酒を飲み遊ぶことを 我も悪しと知れど ……	180
196	張 晩 ちやう ばん	風波に驚きし沙工 船を売り馬を買い ……	181
197	金徳齡 きんとくれい	春山の出火に 蕾の花総て炎えたり ……	182
198	具 容 ぐ よう	碧海渴流の後 砂は集いて島となり ……	183
199	金尚憲 きんしょうけん	さらば三角山 また会わん漢江の水 ……	184
200		金烏 玉兔よ なんに追われて ……	185
201		白沙場の紅蓼の辺 屈みて歩む白鷺らよ ……	185
202	洪瑞鳳 こうずいほう	噫 離別せし日の 血涙の現れなりや ……	186
203	鄭忠信 ていちゅうしん	空山の寂寞たる所 哀しげに啼く杜鵑よ ……	187